

「ブックリスト」掲載絵本選択基準の考察 —作成者に対するインタビュー調査から—

周藤 彩

近年、子どもの読書に対する意識は高まりつつある。特に絵本の「読み聞かせ」活動に対する関心が集まる一方で「読み聞かせ」を行う際にこれまであまり絵本に触れてこなかった保護者や教員らにとって、「どのような絵本を選ぶべきか」という点は大きな問題となり得る。現在の絵本選択基準としては25年以上読み継がれてきた作品を良書とする考えが特に浸透している。こうした考えが広まるなかで、読み手たる保護者や学校図書館職員のための参考ツールとして「ブックリスト」がある。そこで、ブックリストとその作成過程を調査し、読み聞かせにおける絵本選択での「良書」について考察することを本研究の目的とする。

絵本選択においては、読み手がかつて読み聞かせしてもらった作品などの「長く読み継がれてきた作品」を選択する傾向にあることを仮説とした。既存のブックリスト掲載作品の傾向の確認をもとに、主にブックリストを作成している図書館に勤務している職員に対するインタビュー調査を行った。

ブックリスト調査の結果、リストに掲載される絵本には「長く読み継がれた絵本」が選ばれやすい傾向にあることが確認できた。この傾向から、児童書担当の図書館職員に対しライフヒストリーに着目し調査を行った。勤務図書館9館、職員数13名への調査の結果、職員の「読み聞かせ」への意識や絵本選択の際に考慮する点は共通したが、幼少期の「読み聞かせ」体験がある職員はほぼいないという結果となった。読み聞かせの意義を「親子コミュニケーション」と捉えている職員が多くみられ、絵本選択では職員の勤務館での業務や職員研修、学校図書館などから影響を受けている。加えて、ブックリストは乳幼児の保護者らだけでなく、職員自身が絵本選択を行うツールとしても利用されていることがわかった。

顕著な傾向としては、絵本選択において子育て経験の有無が強く影響し、子育て経験のある職員は自身の経験が強く影響している一方で、経験のない職員は研修や指導が絵本選択に大きく影響していることが伺え、「長く読み継がれた作品」が推奨されていた。しかし、この経験の有無によって「長く読み継がれた作品」を推奨する理由は異なっており、子育て経験のある職員は自身の経験をふまえ、「子どもが大きくなってからも読まれている」、「一過性の人気に捉われない」作品として推奨しているが、子育て経験がなく、特に児童サービス担当になって日の浅い職員は文章の美しさや歴史の長さを推奨する理由として挙げしており、その推奨理由に差異がみられた。

なお、「長く読み継がれた作品」推奨の一方で、インタビュー調査では父親の読み聞かせ関与の状況が確認されていたものの、父親を含めた多様な読み手の絵本選択意識がブックリスト作成の際に意識されている図書館はほとんどみられておらず、今後はより多様な絵本選択基準を持つことが結論付けられる。

(指導教員 後藤嘉宏)